



樗山先生著

門曾
775
卷 189

天狗藝術論

來肥中邨直術寫



天狗藝術論叙

大凡為劍術之業。要令以刀形熟支體。故諸家混混而設表裏數品之形矣。蓋支體既整而知變化之用。因形體之運轉隨變化之動靜而覺被技之虛實。正己之心。思而自知。未萌之勝敗。所謂殺人刀活人劍。全非以形體論之。心思手足能應變化之法。則生殺之柄在我而不在人矣。然近世以刀法鳴於世之士多焉。一流分萬沉雷。同而教子弟。或說以高遠之理。導門下能。

學之則言治天下國家或教以左右前後
之刀形而言一人敵十人或練正心氣則
居而所向必言得全勝嗚呼是皆高遠偏
僻之教而非刀劍之正術習者亦受授師
傳之謬而因是以教子弟所謂一犬吠虛
而萬犬傳實舉而不歎哉是故失其樞紐
而或苦支體之業或勞練心之術者亦不
爲不少矣粵有佚齋樗山子者連年委心
於聖賢之域苦思於武門之林然世之習
刀劍者歎失其本而馳其末泥其理而捨

其業悉違刀劍之正理而綴天狗藝術論
一帙以授童蒙始詫天狗之妖言而言刀
法之正理終談兵馬諸藝之至理遂歸充
養心氣之論而止實使士人知其要道且
夫自淺至深自下至高者則天下之綱紀
而此書盡焉爲士者依此教而學兵習劍
則恐度乎其不差矣

享保十三歲次戊申臘月良辰

東亞江城豐嶋郡隱士

神田白龍子叙

文政八歲次乙酉九月念二日

肥後州熊城飽田郡

中村直道寫

天物藝術論卷一

伏齋樽山述

大意

人の動物をりて其初^{うづ}ふ時と必不^ある^ること^く此念
はよせされば彼念^しくこと生^なれ^ば性^{せう}を^て體^{たい}を^て止^とざる者^{もの}は人の心^{こころ}ありて^も心^{こころ}神^{しん}と悟^{さく}く^も且^{かつ}に自^{みづか}性^{じやう}乃^{すなは}ち
天^{あま}則^{すなは}ち志^{こころざし}を^てふ^くこと^も心^{こころ}術^{じゆつ}を^て志^{こころざし}を^て深^{こほ}く^も学^{まな}ぶ^もの^も熱^{あつ}せ^らる^るに
あらずん^ばと^もあ^らざ^らば^も心^{こころ}を^て深^{こほ}く^も故^{ゆゑ}に^も聖^{せい}人^{にん}初^{はつ}学^{がく}の^も士^しよ^もお
いて^も當^{あた}り^の心^{こころ}を^て深^{こほ}く^も故^{ゆゑ}に^も聖^{せい}人^{にん}初^{はつ}学^{がく}の^も士^しよ^もお
終^{つひ}して^も大^{だい}なる^も法^{ほふ}を^て厚^{あつ}く^も入^いむ^もこと^もと^もは^らし^める^るに
幼年^{せうねん}の時^{とき}より^も心^{こころ}を^て深^{こほ}く^も故^{ゆゑ}に^も聖^{せい}人^{にん}初^{はつ}学^{がく}の^も士^しよ^もお

ありて自部倍の倍々、遠きより玩物裁極の此心
 と満すりなく、放俗の後の此心、以て考ふするを
 卯の筋骨の束、以て固くして病を生ずる事なく
 肉を心家の倫として成りて其福、以て結して世に
 達して心、以て流する所、以て大なる助くる、一藝小き
 有りて、是は、以て人する事、あり、亦、以て、以て
 として、以て、あり、として、なる、事、也、

天狗藝術論



一 叙術者あり、曾ておもひらく、古（涼義經の斗、あり、九と
 いひ、）時、鞍馬の奥、小入く、大小の天狗、と、系、合、一、叙
 術の奥、以て、以て、後、以て、濃の、因、赤、坂、忠、宿、に、お、わ、く、
 叙、坂、と、い、ふ、海、盆、と、い、ふ、合、牛、あり、一人、も、て、大、坊、れ、無、盗、と、
 こと、追、拂、ひ、無、坂、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、
 志、深、く、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、
 以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、
 天、狗、と、い、ふ、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、
 の、お、く、よ、入、右、上、の、座、として、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、
 天、狗、と、い、ふ、事、也、

大正二年一月廿日
 中村権雄氏贈

身毎刻がくのこころすれを答ふ者れ一或如山中
風起りて物すまゆべれおふ一必若く鼻言くつ
むさ生一てりくぬすぐなる者衆人といふも
れくせかよてくま合其丁急おびあ一く安田智
くあつてみな捕一度一て一人の曰理一形一
よめく其用あつり系其なあれ其理なるく太
極の妙用を陰陽乃変化よつてあつて人々の
六理の四端の情よつてく一叙術の胸有る事
なり一も其極れ及ていふ沖自然れ妙用小
あつてりあまなり一然も初学の士よつて此よ

と系一も一故よ古人の教の自然れもつて
從横順逆れつて一易一強系一これく
筋骨を束の成心一手足乃一此と習一用小
高り変る應するの事一熟せられ心剛なり一
とも其用一應する一も一事ハ氣と以て修す
氣ハ心と載て形以使う一若くは故よ氣ハ生活一
滞り一これ一割健一して一屈せよ一此事一の
中よ一理一合人て其の自然れ一事の熟す一
く一其和一其わく一不意理おのつて
あつてんぬ一と一ひあつて一事一一致小

正化ともあつてはうへに防にうへに攻むとすねん
かく生むるにすくやう者ゆかり何の畏るこゝもなく
人を攻むともゆるいんと攻むはほむしきもれく漸るこゝ
もたうともあつてはうへに攻むとすねん
くまらふ事もちりれど初するこゝもなく向ひこゝも
少とせ座と用ふこゝもなくいれもたに沛ふこゝも
是を同く稱する所の大形の之法者もた氣の位を辨
きこゝもあつてはうへに攻むとすねん
級は大名に推其る勢の如く沛がこゝも暗く
く血氣を任せてはうへに攻むとすねん 剣術は人神自

然の應用のこゝもあつてはうへに攻むとすねん 形ある相ある
よは自然の妙用にあつてはうへに攻むとすねん 氣は
こゝもあつてはうへに攻むとすねん 氣は
氣和してあつてはうへに攻むとすねん 活達流
りしてはうへに攻むとすねん 氣は
明達止あるこゝもあつてはうへに攻むとすねん
是がたなりふ事なれど自在なるこゝもあつてはうへに攻むとすねん
者人神不動の應用也 礙自在なり 正化をす 意識の
巧を用ひて末の事 小技神と費してはうへに攻むとすねん
河をうへに攻むとすねん 故に他の意術も通ずるこゝもあつてはうへに攻むとすねん

藝術の多場ある曲いろうは是れ彼せむ生涯いざなをすし
得りてはさうさういざなにいざなく一藝いざなの微いざなや其他の微いざなを
もてその心いざなをすなり

一亦一人の口は切なるものあり詮は實物なりといふ句論乃
後より然も是れは事用の用なりといふものなり
切は切事あり突いざなつて事あり事の用といふものなり
と此物に應ずること偏いざななり心別ありといふものなり形
すくはれは中いざなにありあり事の理いざなに達す
て一好いざなをせむや子いざなの如いざなに擇いざなて精いざな一いざなに
てて詳いざななりといふものなり心辨甲悟いざななりといふこと

祥傷の政と執いざなめ一方の大物として款と攻む小豈
よく其功の主人やといふ藝いざな方あるものなり
いともさる小藝いざなをいふなり用はたさる且いざならば
いく夫は放門いざなといふ事とありし事なり然も
またも由いざならば其事は藝いざなをいふなりといふこと
衆いざなのともを純いざな的いざなありし事とありし事なり
必其意いざなにその形且いざなく氣勢あり元て生活いざな一いざなの
性いざなに情いざなこころありし事と我いざなと一いざなの性いざなと精神いざなと他いざなの
端いざななりといふこといざなにいざなていざな鼓いざななりといふ事なり今代いざなに
することなきことなり

観有り物の中て後神より成りし此ら及の習ひ
あるかのごとくんばをく夫故送りよく後故費くら
矢の本竹以て修する物なりといふも我精神
これ一筋なりといふは神ありては妙なり
ていゝ乞乞識の才覚と以てはありては
もて知ぐあまも心微一幸一熱一修練の
功成積ありては終ては妙なりといふも
有り内志ありては神ありては妙なり
ありては神ありては妙なりといふも
ありては神ありては妙なりといふも
ありては神ありては妙なりといふも

の才覚を用ひてはたす力成りては神あり
と此らの性なりといふは神ありては妙なり
精神相成りては神ありては妙なり
りをく夫故送りよく後故費くら

一日用人事もまじりては神ありては妙なり
と此らの性なりといふは神ありては妙なり
親戚朋友は信ありては神ありては妙なり
ありては神ありては妙なりといふも
ありては神ありては妙なりといふも
ありては神ありては妙なりといふも
ありては神ありては妙なりといふも

あり知せざるに在りし事ありしを神にまじりたる世に在りし事
くして事決まり念切する時を内省せしむる事
以得ることを云ふ

一 心切なるはけり氣切なることありし事自然なる事
しるは神のおんよう説下して其標的を示すの事
以修することありし用の費ありしことありし事
説下して修するに及ぶことありし事
ことありし事一性率て信切なる事と云ふは神國に
これれく物に接して應用を得るなり故に大言して道在
明訓法よりいの中庸は率性之謂道なりといふことありし

のよう説下して学者より標的を定めしむるなり
凡情真心の或るはけり凡情は愛記して自ら自性の果
明より念ひありし事一性率て信切なる事と云ふは神國に
工夫は修するに及ぶことありし用の費ありしことありし事
踏し心是事の熟なりし事ありし事一性率て信切なる事
修するに及ぶことありし用の費ありしことありし事
忘れて念の切なりし事ありし事一性率て信切なる事
修するに及ぶことありし用の費ありしことありし事
款の中よりありし事ありし事一性率て信切なる事
修するに及ぶことありし用の費ありしことありし事

こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て
こゝろに子孫の徳を以てするものなりとて其の徳を以て

一又昔子に劉健とて之をなるとの事ありは法は破るる
無法に似てわづらふなり破るるなり破るるなり破るるなり
劉健治を以てて款は脚下に結ぶるは脱氣とて此の

虚とも氣の出入一途に款なる神氣志を以て大石の爲に
此を以て切らぬは此の法を以て此の法を以て此の法を以て
事の巧者ありて表裏に隔るることあり形の換はと
ちては此の形もあらずなり形もあらずなり守て此の
此の形もあらずなり形もあらずなり守て此の
生死とて進んでいふは此の法を以て此の法を以て
破るるなりとて此の形もあらずなり形もあらずなり
これに似るることありは此の法を以て此の法を以て
あることありは此の法を以て此の法を以て此の法を以て
あはれとて此の法を以て此の法を以て此の法を以て

感とまのまある物も一編の氣象として心神良用
自得自在の妙術ありあらず此亦もあつて得ふさまは
因の理明く不切却て鋭氣きなりふきつゝ熱してか
作らるるべし初まうら世物の工更なるまが骨と
失くすひきりして切なるるし

一其中は大天狗とて一くして果はこゝてまゝに羽
翼も甚だ見ゆべ衣冠正しく存するやうして得て
曰各の論ずるのみなればふらうらむ古に信寫く志
一親切な一と事と勢ふこと健うして屈するこゝ
ちくあることなり一師の侍らるる所と信して益あり

よま一事よりうらうらうらとこゝにたことば友よけの
修行熱して昔のま理と悟るゆかり内徹するこゝ
深し昨の始り事と信しく其念むこゝろは諸くは
自拜ふと信のこゝはけり而不殺をいふ者て流るる
るはあつてず此乃にんと申して修行熱せんこと以て
のこきふんととてま一自得する所ありたはて
昨の同作まのけりたは是は許すのこゝのすより
後してあゆむことこれ一唯藝術のこゝにあらず孔子曰
一隅を奉てその隅とみてあつては後せん是
左のよき法なりけりまの藝術藝術のこゝに信して寫

今人修養く志一切をすずけ壯より言は厥ひ間と
好し小利と見て迷ふふをんことと欲するのち古法
の如くは成りたるものあるがごとく今人の言より
途は成て初学の者もも格別と設せしめ得共す
るべきをり一様と扱はざるは此のころのこゝ
をくすらすは区別として止意多し此の理は上
に成て古人と違はずし一様は成る居たり天
しも上は工夫とするのこゝに成る時の缺ひを人
以て争くは此の理するがごとく一物あるは氣と扱
して一物あるは心と扱して一物あるは形と扱して
一物あるは質と扱して一物あるは用と扱して

報の心を働かざるは此の氣は清のく融和の未と
成る本と志とのふに可なり一向に扱して成す
るは清といふ不可なり事ハ剣術に用なりそ
用成於ては体の理何より成りたるは人々用
と成るよりよりと成るは格と成るは格と
用の自在なりことあるは作用一源顯微間なり
理ハ格と格とあるは事ハ智と智とあるは格と
氣の成りて形自在なりは事ハ理ハ因と生は形
なるよとのハ形あると此ハ主なり故ハ氣と成り
事と成りて心成りて氣と成るハ物の序なり

能くも事習熟し〜〜自覚さまり神さるるはこ
とありと母人志梓とありて能く走ぶこと大なる
〜海がこ〜〜何の工更とさるるんや只あ
小習熟〜〜大なる入ても能くこと成し得る
神定り〜此自在に汝を以て樵夫の言を執成荷つ
〜細きその活法傳ひ瓦師の天守を登て尾と
お〜習事にお熟〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜神定り〜自在に汝を以て
〜〜〜〜〜此藝にお熟〜〜〜
徹〜事よ〜〜〜〜〜

こ〜〜〜神活〜神定り〜変化應用無碍
自在さるる能くも此〜〜神活〜
自ら知こ〜〜特む〜〜あり故に云
以て論を〜彼の言分〜〜自在に
形を〜身に活く〜妙用不測なる者ん神の威
能くも事習熟し〜〜自覚さまり神さるるはこ
〜〜母人志梓とありて能く走ぶこと大なる
〜海がこ〜〜何の工更とさるるんや只あ
小習熟〜〜大なる入ても能くこと成し得る
神定り〜此自在に汝を以て樵夫の言を執成荷つ
〜細きその活法傳ひ瓦師の天守を登て尾と
お〜習事にお熟〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜神定り〜自在に汝を以て
〜〜〜〜〜此藝にお熟〜〜〜
徹〜事よ〜〜〜〜〜

一問曰神く我こと此若し神してはるるの及
曰何ぞは〜〜〜〜〜

況や劍術の一小藝をや夫劍術の大伴氣の終殊
なり故に初学もは事と以て氣以修せしむ初学
より事以離れて氣以修する時を空めしこころ
しんじ所なく氣と修すること熱し心は迷す
べし此乃お迷ひの生候の利地よるべし心の妙
用以知こころ易くありき徹して変化自在に
なるこころ難く劍術の生死の深し用ふ此術をり
生死捨て死なれどこころやとく死生以て二つは
せざるこころいふべし死生以て二つは生死の
よく自在に成るべし

問 何れに禪僧の生死以脱しこころ若くは劍術の
自在に成るすべし歟

曰 所約の宗旨是なり彼は痛也以脚に寂滅以得し
て初より心以死地は投じて生死以脱却するは若くは
故も多分の款の中よあつて此形の微塵よなりとも
念以初せざるこころ若くは生用の分はつら
らぬ唯死と厭はざるのこころ吾人死生一貫といふは是
も是なり生は生も死は死もせしむ此心と二つ
もせしむ唯後の在りは消くも生死其のこころ
以て自在に成るは是なり

一問生死は心すれこゝろ一をり猶ようれはせの目成
ききば此の自在はなほそのの行もや

曰初よりん成用は示るなり彼は寂滅と云ふて
その用はんきき唯死成よりす死はなほその用

よあつての自在をなほ心してあつては死の
生を以て二つよせび生よあつては生おたを

死よあつては死のなつてあつては死の念
と執することなき故よ生よあつては自在成を

死よあつても自在成を以て成の造化を以て幻あり
人るを成成とて夢幻泡影とて成よ生よ成をす

なほよ死よ成とて此成成を以て之りうれ生生のり
相成つくとんる一は成成難れ君臣成廢一壽

禄と班と武備成設りび君人の礼樂刑政とんる
こゝ嬰因の成を以てんるがめくも成と持て用ひる

の剣戟何ぞ此よんあつてんや只死よあつて生成
成まば一切を成とれんの新要を以て成成成

一問を成成術者の禅僧よ成て主成成と持てんる
者あるは何ぞや

曰禅僧の成術の成成成成
よそのをよとれいよく物よ成せず成成成

よそのをよとれいよく物よ成せず成成成

ゆゑにうへにうへに生れ因りて二界窠窟のこゝに心
顛倒するといふこの生れあやまらざるは心あるものの
彼も年この養納の志一途に寝席に坐んぢん
氣を殊と事双を一途のるおいて心程のまじ
并も心憤満とて年月に送るに保体よをて
生死の理を自悟し一方法惟心の所ををるおとす
心とちまらよひもも神をさしりてこのむを心とな
れて此自在心を以てのなりこれ多量氣を修し
事よとて修るも其うつらよの心なりとるものなり
一月とて修るはありて此種の修作の一擧のト
し并悟しとるものなり此も同一舎卒の才よあ
らぬ藝術未熟の若者得知識よをさしりてと
并悟すといふあしす

天狗藝術論卷二

一切の藝術放つてつゝ茶碗^{まが}——といふまゝを事
の修練よりの上手故をいふといふもさあ妙と
かすといふれ氣をとり天地の大きな日月の明らなる
四時の運りをも異の経来——と万物の生殺とを
そのこれ陰陽の變化よりいふ妙用を言説のそ
を所あるすす万物の中にあつてその氣成候と
と生と處^と氣の生のみをとりなり此氣とらふ
とをとり時をたひ生記の際^{あひ}此氣の變化のく生
忍原^{しの}候^はれ時をたひの終^はれ^は知^らず生記のたよ

明くするは出明鬼神通——くしつなりあるゆ
へ今日力成るといせよ在ても自在なり死よ
あつても自在なり佛ありて再生流結の想はり
かろゆは造化を以て知ありて空とあり識を
去く不來不來の言より空は成佛とい聖人
言ハ再生輪廻のあをれを——化よ空——くを以て
帰すありて氣成修するは空ありて心成り
一生死の理ありやまきあはれも世生にほらるるの各
沙のこは迷心——のこ迷心ありてするは神く
まんで帝は大有成とありて空ありて

一問を換則はおのこい家はくさうく次はくも
修行の大有成なり

曰道は見——くす空ありてありてありてありて
たは空ありてありてありてありてありてありて
自はくしつ空ありてありてありてありてありて
佛小成なりやありてありてありてありてありて
及んでありてありてありてありてありてありて
ひそふ空ありてありてありてありてありてありて
汝有性せよ身を以て空ありてありてありてありて
神ありてありてありてありてありてありてありて

心氣の靈をこころの天理と異にして此氣はこころの
なりん神と形を色身なり一氣一業一と用は
なるものなり上下を通する若し氣をかり信はふと
つれは白より心物の觸と動く是と信して
思惟は来する是と念して心感のまたらうといふ
自性の天理は率ふとこころの冥明始終を貫いて氣の
方動をこころの舟の流るるはひくもゆるとこ
初るとも直動をこころの初めをこころの動を
無動といふ凡人の生死の迷根といふは世の常
は依して空明の蓋をかりぬる森怒哀樂未發

の海は観をこころの濁水は感はたるがこころ一念信
うこく時々の隠伏の若しは悟欲高初して我ら良
心は直氣流水は逆上りて舟を揮うこころはあは
毎初いて内あきこころれ一氣高初する時應用
自在なるは観術は勝負の事をかり初学より生死
の迷根をのりては以ておとらぬも生死の迷根は
うたひのりて故は生死の理をわいて心と居て一氣
は感の清負の事は試み苦をわいて文字をわいて殺
身は初して事熟して氣をこころ其理を徹して
うらふ本心は感をこころは此一途をわいて空明空

心不ききと然る此念は、動するこゝれ、此念動せば
心所なきを、空無に云く、心は活き流る心と載
沛然こゝれ、否乎こゝれ、と形と沛するこゝせ
得自在なり、んに感、應、用、乃、迷、や、ち、事
戸と罪い、く、ま、月、の、こゝ、入、こゝ、物、成、拍、と、並
る声の急するこゝ、物、類、の、應、用、の、形、なり、我、の
此念をけ、こゝの形に此相を、相、念、の、形、と、形、ふ
あゝと、く、者、なり、形、を、お、さ、け、こゝ、向、て、款、ま、ご、の
れ、と、款、さ、れ、我、も、れ、と、我、の、れ、の、款、あ、る、こ
我、の、れ、が、なり、本、心、者、の、言、語、邪、心、の、念、の、微、なる

まで、微、なる、の、こゝ、の、微、なる、は、我、の、れ、の、微、なる、は、
う、と、来、て、移、り、成、徒、の、人、の、邪、心、を、向、ふ、と、あ
た、と、る、こゝ、の、自、然、の、妙、好、を、若、我、の、れ、の、移、り、
ん、と、せ、る、此、念、を、り、此、念、我、と、空、なる、が、心、沛、て、應
用、自、在、な、る、に、不、測、の、妙、用、を、り、為、り、て、身、は
神、の、こゝ、を、た、者、を、と、剣、刺、悟、入、の、人、と、い、ふ
一、心、も、鼻、舌、の、端、ある、と、翅、ある、故、に、他、の、事、も、お、つ、と、是
明、空、を、存、ある、と、心、の、應、用、自、在、な、る、を、こゝ、と、あ、る、と
ご、心、の、始、り、の、偏、り、此、一、心、の、志、と、心、と、終、り、
我、の、れ、の、本、心、の、ある、と、是、代、の、事、の、疾、痛、を、切、なる

と云ふ或や心術と助家ことあるや心術成す事との
此亦心自持せし日と成す所の藝術我ら心成助きて
ま本邦の妙用成證せし一是よおいて藝術もま
自在と成すべし然も初より執する亦乃一念持し此者
此に學術藝術にも小只この私心を去るま是の天下我
と初は去るなくして應用世將自在なり私心ハ金銀
貨材結欲術巧の類はまあはるび不考よりけむは
いとも一念の心執する所あり私心なり少
しく執すれば少く心神成るま大に執すれば大に
心神成るまごと藝術はま進する者まま業乃上よおい

この私心の已と害するまこく明くふまもいづも廣く
心伴應用の間よ試てま心平れ心術成す者ま
いづも理の極まるとをすく一念隠微のるハ成し
た記若なり心術成す者ま我なり藝術を成
するまのま我なり此心二つあり此とこらま
た熱思す

一今事熱し私利一務負の利を試とくうこふこ
と心成すここれ一邪念のこ自在成なるま
心術一主妙用神の如しこ下もいまこ持し存あり
こ心成るままものハ每人此能成走る凡神の天

法を〜是と母意といふと〜情欲をそのあらはせ
しめ小巧をなす〜物とを〜程と措き〜くやまひ
時を執らん侘然係結〜が空明の意を〜是と有心
中のふれ人を情欲心の言とならざるありての
め小措初せしむる〜おのれに困るひと成るす
故ゆゑは言術の此あるの惑を拂ひ去り有心の
天理を認むる〜空明の意を〜夫れを〜
小者の行為を用ひ〜なく物にあらざる〜物の
ためは設けられず事の本質は但し〜束縛〜も
れ〜願ひ〜もれ〜なく〜思惟すれ私を〜

ありて因果を〜なく〜自事〜方すれも神と
困ひ〜これ〜命は〜決〜く〜
とれ〜惑〜く〜
〜と曲心〜容れ〜
利と損を〜小知法〜
〜と〜
變動すれも此の〜
れも〜
〜の〜
屈する〜

争ふことなく道家ことなく佛家より此志きくは
ましく應接のる耳目よりおろその考証以んとはす
其のうらむものたるは大小の〜 叙術の極制を
此よりは故より藝術のわいてはする所の業は以
て内省より日用常行のなる一箇〜 心術と記せ
て藝術とま〜 内は徹〜 相助者お考ふてま
益大なる〜 海より海より入早に端て言ふ
よ套は先古(藝術)を以て道学と物け此と海し
彼は故の自故よりある年宇のよりの〜 記
自在なるは或は病力又ハ公用の術なく〜 して事

城精氣ことある〜 武士の職を以て心取用ひざるも
あま〜 杖〜 びあるひは〜 け〜 して〜 記
〜 此心の二つよなる〜 右を修せん〜 名
およ論する所の志は三家の愛せざるは〜 修
生死一貫の理耳も大地の物お〜 符〜 ありな〜
取の外なる〜 こと公用の勿論は過火の四りは勅めな
〜 心も四の物は所身目より〜 所の物と以て打太刀
〜 して心の海はわ〜 こと〜 間暇の〜 藝術
よ〜 なる人よある〜 事城のひ〜 理はすて尔
記〜 欲〜 向〜 なる〜 記の〜 記とほし

て我と怯くせんのご何の憂ひこころあらんすむかの
唯志一の折ききみ成りあふ形もいむがあらは強
弱有り極力あり用者なりとのありみれ天のを
はあしとくかたけく私する所も何れは唯志の
家よあつくと天地鬼神も是と奪ふことあるは
かたゆへは形も天を為す所もまうせておたねて
き成りあふと小人の天のわら成りてくおする
而成りて天のする所もお知力のおよむまふをり
ま知力の及ぶまふ成りあふまひとく家と神とくし
ひふとのいむなり

一洞あま多字あり身いまご長せぬ叙術を修する
こく如行しく可なりむ

曰古の御抄應對より六藝は遊むごのち大学
よ入るく心術成りてくこれ門の務成之とれ六藝
よ去りて道学成りてく今より身いまご長せぬ
あく事理の通達する程の力れよ者い小知を先よ
せび師よまごのしきとあつて用の足おとて事
成りあふとのまごのたごてつと筋骨を清く
まよとく氣と流るく成りてくま換削と竊ふ
しと世ののり成りてくこれ其の本の極用なり

なくせむしとく事自然の應し柔然以て剛然
制す事ハ末をうりとしひく頑冥墮亂をかりて
足とあことひちりすんで現世後生とも取夫ふ
魚

天狗藝術論卷二終

天狗藝術論卷三

一問何と動てとくしとれく静りして志成りなる
こしれしとふ

曰人を動物なりうごころを家ことあことび日用人事の
應用多端をりしつとく此ん物のこのよ動まされず
心欲せよ家の心伴を恭然して自若りう叙術を
以て治るる多智の中よ元冠りま右往左決しとく
く何も生死を決して非定りあ智のあふ念を動
せざるを初いて初くこしれしつとく汝馬を乗者以
んぞを若くの乳若の馬未如馳すれし乗者の心恭

申して忙いそきこしれ形かたちのうましつこいしれ
卯うより見てゐるこいしつこいしれ
れが物ものれとおきつるのよて馬うまの性さがは驚おどかすれ
故ゆゑよ人ひと鞍くらの上うへよ跨またぐるよさうりつこいしれ馬うまは
従したがつこ困こまむしれく自得じとくく性さがく馬うまの人ひと成なり
すれ人ひとの馬うまと早はやすれて精神しんげん一いつ体たいふして相あをま
す先まを翻かえ上うへよ人ひとなく翻かえ下したよ馬うまさしつこいしれ
是こゝ初はつこころごとをふのうらやあしれて見
易やすきこの也なり未な熟じやくなるとれ馬うまの性さがは驚おどかすれ
あつたなる馬うまと我われもさすれつこいしれあつたなるのこ

すれさうりつこいしれ初はつ初はつこころ馬うまも亦また疲つかれ
るし或ある馬うま書かよ馬うまのよこりかたつこいしれ
おれあゆんを性さがでいふあつたなる馬うまも亦また疲つかれ
まきかたつ是こゝ馬うまの代しろりつこいしれ性さがを知らせし者もの
なり唯ただるのよあつた人ひと成なり供たつた此こゝ人ひとある
一切いっけつの事こと物もの名な性さがは驚おどかす小こ知ちと先ますする所ところはあつた
さうり人ひとと困こまむのさうり何なにと静しずかして志こゝろのな
れつこいしれさうり森もり好この哀あは楽らく未な殺ころの所ところ心こゝろ体たいをくし
て一いつ物ものの蓄たくわへなく至いた静しずかの中なかより物もの事ことは
さうりて應こたへるさうり用もちきさつこいしれ静しず

ありて初るる者も心の伴也動て物に應ずる者も
心の用なり伴はるるありて元理道具そかにて空明なり
用を初いしく天則は従ひ多可事も應ず神用を
一深なり是を動てごとくこれく静して是のり
なりことれといふ叙術を以て流るる劍戟けんげきを執て
款よ向ふ潭然たんぜんとして思ひこととなく慎ることも
れくともせんくやとらふ念も眼の中より款の来る
よ應て應用を待自在なり形はぶごとく空の下の心は
静の神とういなるる志のりなりといふも初の用
城しろ欠す流作静とて物をく可象かざうする初なる
すこととあ

一何とて水月といふ

曰流義よりよりて色く義理は付てり下も平亮之心
自然の應用は多し月と相らるる事ありてなる者
れも空淨の池よて空洞の神製なり

うけおこと月とおもふ心もあどおもふ心

波の地此津新の心より一々心自然の應用は悟るべし
又一極の明月天より一のて万川各一月と具そかふが
ごとく光を分てあるはあつてはあつてはあつてはあ
新をく亦あるは悟るべし月も新あるはあつてはあ
万川より一のて一水も極うがはあつてはあつてはあ
損れく又その大小はあつてはあつてはあつてはあ
名妙用は悟るべし一々の法獨をてはあつてはあ
極とも月の形色あり心も形をく一々形をありて
名をすあるはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
とくはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ

一河諸流小流心より一々心あるはあつてはあつてはあ
曰事よひつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
不執れると此の應用あつてはあつてはあつてはあ
極を打あきてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
この我なり故よお後左右を待自在はあつてはあ
妙をよはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
うりなつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
盲突めつつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
くふらちあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ

一諸流は先^見といふことあり此まゝに初学のよめん^見流氣を
物^どを墜^ち氣^き小^ち答^たの言^ごなり実をん^ん体不^ふ動^どしてかたき
紙^しうしなまじ^じ浩^{こう}氣^きを体^{てい}み^み亮^{りやう}氣^きとま^まい^い毎^{まい}も^も我^{われ}先^{せん}
あり人より先^{せん}おつけむと心^{しん}以^い用^{よう}するあり^{あり}び^び手^て
亮^{りやう}劍^{けん}術^{じゆつ}はせ^せ氣^きを^をな^なつて^て死^し氣^きを去^そと^とあ^あら^らん
然^{しか}の中^{ちゆう}に^に待^{たい}つ^つ待^{たい}の中^{ちゆう}の^の然^{しか}といふも^もこれ^{これ}自然^{ぜんぜん}の^の應^{おう}用^{よう}
なり^{なり}初^{しゆ}学^{がく}の^のよ^よめ^めん^んを^をな^なつて^て各^{かく}を^を付^つけ^ける^るも^も動^{どう}く
う^うご^ごく^くこ^こと^とれ^れく^く靜^{じやう}め^めく^く志^し何^{なに}なる^{なる}こと^{こと}れ^れくと
よ^よの^の方^{かた}也^{なり}初^{しゆ}学^{がく}の^の若^{わか}い^い氣^きの^の剛^{かう}柔^{じゆう}事^じの^の應^{おう}用^{よう}を^を以^{もつ}て
修^{しゆ}く^くされ^れの^の因^{いん}づ^く所^{しよ}を^をな^なす^す故^{ゆゑ}も^もま^まに^に而^{して}然^{しか}を^を各^{かく}を^を

故^{ゆゑ}ゆ^ゆり^りに^に物^{もの}を^をな^なす^すも^も各^{かく}以^{もつ}て^て氣^きを^を對^{たい}する^る名^なを^を執^{しつ}して^{して}ま^まに^に本^{ほん}
を^をあ^あら^らま^まり^り名^なを^を付^つけ^ける^るも^も各^{かく}を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
も^も角^{かく}も^もま^まに^に大^{だい}意^い城^{じやう}識^{しき}を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
や^やう^うれ^れく^く一^{いつ}切^{せつ}の^の本^{ほん}を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
ま^まに^に大^{だい}意^い城^{じやう}識^{しき}を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
一^{いつ}お^おも^も論^{ろん}する^る如^{ごと}く^く一^{いつ}身^{しん}の^の初^{しゆ}学^{がく}を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
あ^あら^らん^んと^と心^{しん}の^の氣^きを^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
ま^まに^に大^{だい}意^い城^{じやう}識^{しき}を^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き
形^{かたち}の^の氣^きを^をな^なす^すも^も動^{どう}く^くと^とれ^れく^く氣^きを^を以^{もつ}て^て鬼^き

以てありは氣活すは事の應用からくある疾
ふらるる事の應用重くして運一氣の剛健と
そふらるるも偏剛を用て和なきは折きて
用りもれ歩倚るのハも次虚りして用なきは
用ハ和気せぬらるる中ハ剛健の氣を流して
弱めハ弱と柔と柔れハ柔ハ生氣を令んで用て
弱ハ向ハ力れくして用なきは休ハ情なきは柔なり
休ハ生氣を令んで情ハ氣を逆ト柔若ハ氣の
よる所ありて解さるる也念ハ因ト柔あり法
氣ハ因ト柔ありは氣の由あり用ハ柔する

迷なりとるものれは故ハ柔なる氣の應用逆一氣
とて事の應用燥くとのを陽として根れ
和くして濡ハ柔なるを枯葉の風は軟くあり湿
沛若ハ濡氣のこもるも和もこもるも應用の運
まよりの也凝若ハ氣倫ハ聚て因ハ決く形となす
止まりて動さるるもの也故ハ柔なる應用ありて
その流るる融和せざるはあつて是も亦念の疑ハ
疑あり念ありは氣あり志ありこもる念ありは志
こもるは氣ありは念ありは志あり試みる

一剛柔變化して自在なるもの應用也唯叙術

のこふあつては字術といふも氣の割果変化自在なるを
修へば心の妙用をあらたまるべし心体の妙用は迷なく
して修るべしす故に叙術ハ氣とて修して心体の
照らす知能なる字術ハ心氣とて修して氣の変化
妙用を叙術とも只記と云ふ識の方小知のこめりて
身は修へば心とて修るべし心氣の暗にして其用
紙をさす剣術者ハ氣と修するこゝでも只剣術應用
此亦ものこ修するがゆへ心の靈覺もまゝに一方小のこ
さすて日用常行ハ乃さここれハ心氣とて一修を
こおのこ試みて大氣と識はせし修行未熟なり

心このこも分る意とて益ある處

一諸流も小を捨則は及んで一なり流費くは先
覺の人の修練とて吾人入るはとあふ門を導び
お修もまたすまらぬ風景は也此は修とて
修は是とすふもの多し是とててまゝに流費
多端して互は是非は事物とて一なりと捨則ハ
是非の率へべきことこれハ其中途の風景ハ皆意識の
間名見のこ其大なりこちもなく三つもこれ別あり
吾人ある邪正のり剛柔あり長短ありま末とて其の
論して不すべしす吾人知る前人の志はすべしとあは

是なりあはる明あれ人にも不明あり空かのと一
人知れりて天下これ思ふらんや故に臨すこといふ
よのなり學術とつた亦知り老佛莊列業又許由
く徒も無我無欲の心体城居こと一なり故に一毫の
私念心流を係得るものなり一思ふは心所の風景
をなかり故にこれして天学となるものなり聖人の道を
天と戴き地と履むて山河大地をまことこれ夫婦
の君不有と興つるもふぐ能ひふて天下仁義の
取せざる者なく孝悌忠信を非ざる者なく天竺佛
氏の徒といふや毎聖人此流と蒙つとく仁義忠孝の

流せざるものなり一天学の風景のよくなるものなり
あらず天地万物の大地上より見下はるあり天
学の流もこれ聖人の列流なり大道は宵くことあり
とん

一尚法濁は法濁なり何を唯法は用ひく濁と云や
曰濁も用はるあり物も剣術の用と用はるる貴物
法濁はさくして付くは法と用く濁の重き法用
ひざるの物と乾くをよは火と用てあを申す各を
用よるもの心の聰明痴鈍も亦気の法濁のよき
法よるもの自性の靈光速疾のなり質のなり

聰明より心体として塵靈として昧きことあり唯濁
氣を靈明に掩ふがゆへは是れ痴と云ふ濁と
ちん昏くして理を通せざる是れ愚と云ふ作て
運きを死と云ふ濁氣を去ることを重く其渣滓は
ひれ念位にて暗中に迷妄し思ふ所を掩ふこと
あつて人の心も決せん人も従ふ人も若んて
止も是と痴といふ凡人の生貨千差万別なりとい
ともこれ濁氣に濃淡厚薄のこころの靈なり此氣
の在るこころ又あつては云これ此氣を去れば此果
なり又人の心も棄てては成るなりわく風烈く波

あつては時ハ舟風まきこころの波はひきこめてさめく而
あつては人舟中にあつてあつてこれ濁氣を去る
て心の静くするが象なりかあつて風や波あり
うかりぬるがゆへに棄てては成るなり
人心の邪と云ふ身も死するこれ濁氣に去る初
こころ大なる熱の炭火より吹出た火の大風なり熱
まき濁氣の偏り又偏屈ありて情のまじりたる
埃は此教固て力あるなり心強くとり徳をよと
のハ陽氣の根をたたり根が弱る者ハ氣の餘り体
充たぬなり心の決まらぬ若くは弱りて定まる

也亦痴^ちより^ちり^り是亦^いなる^る濁^じ氣^きの病^びなり又^ま聰明^{めい}は
て篤^{あつ}実^{じつ}なる者^{もの}は陰^{いん}陽^{やう}和^わとく欠^く闕^{くわ}なきものなり知
明^{めい}敏^{びん}なりと行^{ぎやう}篤^{あつ}実^{じつ}なりとざる者^{もの}は清^{せい}陽^{やう}の氣^き行^{ぎやう}て陰^{いん}
粘^{ねん}の汚^けきなりけ篤^{あつ}実^{じつ}として知^ち明^{めい}敏^{びん}なきものなる者^{もの}
陰^{いん}粘^{ねん}の汚^けて清^{せい}陽^{やう}の氣^き汚^けき也^{なり}陰^{いん}中^{ちゆう}の陽^{やう}陽^{やう}中^{ちゆう}の陰^{いん}
主^{しゆ}中^{ちゆう}の過^か不^ふ及^{きやう}沙^さ泥^{でい}厚^{こう}為^な于^こ差^さ万^ま別^{べつ}論^{ろん}一^{いつ}是^しは
う^う欠^く類^{るい}を推^{おし}て細^{こま}き察^{さつ}する所^{ところ}はこれ陰^{いん}陽^{やう}清^{せい}濁^{じやく}も
漏^{もち}るこれれ上^{かみ}の天地^{てんち}の大^{だい}より中^{ちゆう}の蚕^{さん}風^{ふう}乃^{なり}微^い物^{ぶつ}まで
も陰^{いん}陽^{やう}の氣^き充^{ちゆう}ぎ終^{しゆう}は主^{しゆ}形^{けい}の用^{よう}成^{せい}成^{せい}なりとあり
今^{いま}これぬは其^{その}大^{だい}畧^{りやく}は成^{せい}なるもの

一何^{なに}を以^{もつ}て此^{こゝ}氣^き成^{せい}成^{せい}せん

曰^い唯^{ただ}を濁^{じやく}と去^きの^り陰^{いん}陽^{やう}此^{こゝ}氣^きは生^{せい}く変^{へん}化^{くわ}して天^{てん}地^ち
万^ま物^{ぶつ}大^{だい}なり^り濁^{じやく}は陰^{いん}氣^きの渣^さ滓^じなる^り渣^さ滓^じは止^{とど}
りて活^{かつ}せぬ陽^{やう}の助^{すけ}を待^{まち}て^りとて也^{なり}は主^{しゆ}用^{よう}也^{なり}として
物^{ぶつ}を^り清^{せい}る^り泥^{でい}成^{せい}成^{せい}なり^り忽^い濁^{じやく}なり^りなり^り如^{ごと}
既^{すで}に濁^{じやく}あり^りとな^りる^り物^{ぶつ}を清^{せい}む^りことあり^り物^{ぶつ}は
酒^{さけ}なり^り却^{かへ}て^りの成^{せい}垢^{かう}す故^{ゆゑ}に學術^{がくじつ}の良^{りやう}知^ちの明^{めい}を以^{もつ}て
氣^きの濁^{じやく}と去^きの^り濁^{じやく}氣^きと去^きの^り氣^き生^{せい}活^{かつ}し心^{しん}伴^{ばん}ひ^り
あり^り心^{しん}迷^{めい}心^{しん}憂^{ゆう}と^り心^{しん}憂^{ゆう}と^り心^{しん}憂^{ゆう}と^り心^{しん}憂^{ゆう}と^り
一陰^{いん}陽^{やう}として一^{いつ}氣^きなる^りこと^りも^りす^りて^り分^{ぶん}別^{べつ}と^り成^{せい}る^り用^{よう}

千差万別乃異なるあると其用の異なるも亦然して其の
一なる所と云々其時其道明なるに其の中の一
なる所と云々其の異なるも亦然して其の
りりとの唯心^{こころ}を^{つまひ}審^{つまひ}するに^{たま}ます^つ言^{こと}は
の^{たま}ます^つある^つある^つ今^{いま}亦^{また}天^{てん}狗^{くわう}と^も心^{こころ}作^{つく}は^なす^つて
解^げせ^るふ^ゆは^も有^ある^つの^つ述^つと^も以^もて^も論^{ろん}する^つなり

此^{こゝ}の^つ氣^き中^{ちゆう}に^も存^{ぞん}する^つ魚^{ぎよ}の^つも^も中^{ちゆう}に^も游^{ゆう}泳^{えい}する^つなり^つ
魚^{ぎよ}の^つ水^{みづ}の^つ深^{ふか}き^つも^も以^もて^も自^じ在^{ざい}な^する^つ大^{だい}鼻^びを^も深^{ふか}淵^{えん}の
あ^らう^つさ^つさ^つの^つ游^{ゆう}泳^{えい}する^つも^も以^もて^も自^じ在^{ざい}な^する^つ又^{また}も^も淵^{えん}の^つ深^{ふか}き^つ
魚^{ぎよ}因^{ゆゑ}に^もあ^らう^つさ^つさ^つの^つ魚^{ぎよ}に^も心^{こころ}を^も氣^きの^つ剛^{かう}健^{けん}の

よ^よ以^もて^も自^じ在^{ざい}な^する^つ氣^き之^のこ^ころ^を心^{こころ}惟^{ただ}も^もこの^つ氣^きは
く^くの^つこ^ころ^を心^{こころ}母^{はは}と^も帰^{かへ}る^つなり^つゆ^ゆの^つあ^らう^つさ^つさ^つの^つこ^ころ^を
魚^{ぎよ}の^つ氣^き中^{ちゆう}に^も存^{ぞん}する^つ魚^{ぎよ}の^つも^も中^{ちゆう}に^も游^{ゆう}泳^{えい}する^つなり

一勝負の本よりきりあう一切の本天よりまうするも
運^{うん}ぶ^ぶの^つま^まう^つする^つの^つま^まう^つする^つの^つま^まう^つする^つの^つま^まう^つする^つ
名^な理^りと^も究^{きゆう}め^める^つ本^{ほん}の^つ其^{その}尚^{しょう}論^{ろん}の^つ義^ぎ理^りと^も究^{きゆう}め^める^つ
く^くの^つ巧^{こう}と^も用^{よう}ひ^ひす^つ為^なる^つ特^{とく}に^も男^{おとこ}を^も執^{しやく}沛^{ぱい}する^つ
た^たま^まは^は是^{こゝ}に^も天^{てん}の^つま^まう^つする^つの^つま^まう^つする^つの^つま^まう^つする^つ
天^{てん}の^つ任^{にん}じ^じり^りの^つ百^{ひやく}姓^{せい}の^つ農^{のう}業^{ぎやう}城^{じやう}法^{ぽう}と^もひ^ひび^びく^く耕^{かう}
一^{いっ}種^{しゆ}ま^まは^は芸^ぎの^つく^くの^つ長^{ちやう}を^もき^きる^つ城^{じやう}を^も一^{いっ}浩^{こう}水^{すい}

早魃大風ハ流カメ及ミテハ是ハ天ノ徳ナ
ルナリ人事トモテ天ノ徳トシテ分カセ
天ノ徳ヲ修ムルハ只自修トモテ期^期是ハ
徳ノ徳ナリトシテ修ムルハ只自修トモテ
考ムル徳ノ徳ナリトシテ修ムルハ

一 問心傳ハ形色を眞をシ如用ハ神をシテ測
あるハ何レ何レと以テ心と修せん
曰心神ハ言と容とハ其徳のうごく不意の知見
あり所應用の際ハ其不及と制シ私念の
妄動と去自性の大則ハ其徳のうごく

下ニ至良知ノ發見ヨリ何レノ良知ノ心傳の
是明是非邪正照して天地神明に通する若是
を知ると凡人ハ濁氣の妄動ハ掩^{おさ}て照し全
くハ罅隙^{げき}よりつらぬる若是と良知を以
て念及ばば是ハ非と知る人の誠あるハ
感^{かん}ハ其徳ノ不吾欺^{おご}して内快^{うち}より其徳
ハ其徳の是なり其徳ハ其徳ハ其徳ハ其徳
の心生^{しん}ハ其徳ハ其徳ハ其徳ハ其徳
で正^{ただ}べらう其徳ハ其徳ハ其徳ハ其徳
て此ハ其徳ハ其徳ハ其徳ハ其徳ハ其徳

ことばをたれい濁気のあ動おるはくく志のまり天理
乃冥明ひらりあくるもくく 和念いおのせ城利あり
此心より生は命のせ城利ありくもくくなり付た
人よ害あるともかりん終よまこく一箇となす 忍と
をく自と亡はあよ五心と修するく忍と修するく
二事ありあくるも好よ孟子浩然の気取や一なるは
論をく志取持ぢりあつて別よ養気の工夫れ
一問佛あり意戒を忍く去い何きや

曰佛法の工夫の吾あくるす意戒のくく知の用なり小く
わくくこのあくるす只戒を助て本伴取をたきこく

けくくろくくたすくくはあくくむむくく意戒の士卒の
ごくく物ああ掩をれ暗弱くして勢をくくたけ
士卒将の中知取用ひすむくく専らく松の誅を
用ひ私のまくくたをくして陣中和むんあ動して
物(強)に終よ敗軍の禍に在者なり 此時あくる
てハ将如何もするくくあくるくく大軍のさく
たえくく志のむかこくあくるくく云くく意戒を
つくくきくくして情欲を助けあ動するはくく
り王飛取あるくく割くくくこのなり是こ
穢の罪はあくるす将知勇あくく法令明くくなる

時ハ士率^ハの命^ハ以^テ終^ルと^シ私^ハも^ハ終^ルと^スる^ハハ^ハ不^レ忍^ム
る^ハハ^ハ以^テよく^レ欲^スと^シ破^ルり^ハ何^レと^スる^ハハ^ハ以^テ欲^スの^ハハ^ハ
破^ルる^ハハ^ハ以^テこれ^ハ是^レ士^率の^ハハ^ハ以^テ大^ニ
功^トと^シ主^ハなる^ハハ^ハ以^テ主^ハの^ハハ^ハ以^テ天^ノ明^ヲと^スる^ハ
自^性の^ハ天^ノ則^ハよ^リ以^テ知^見は^ハハ^ハ以^テ何^レと^ス
ち^ハに^ハする^ハの^ハ私^ハを^ハ人^ノの^ハ用^ハに^ハて^ハ國^ノの^ハ政^ト
と^スる^ハハ^ハ何^レを^ハ意^ハに^ハし^テと^スる^ハハ^ハ人^ノの^ハ身^ヲと^ス
と^スる^ハハ^ハ以^テ此^ハを^ハ以^テ知^見と^シ自^性の^ハ天^ノ
一^問古^ノ中^ノ華^ノも^ハ叙^術の^ハ傳^ハある^ハ也^{ナリ}

曰^ク昔^ハい^まも^ハ其^ノ書^ハ以^テ人^ノに^ハ和^漢と^シも^ハ以^テ其^ノ別^法
活^達と^シて^ハ生^死と^シり^ハ人^ノ力^ヲを^ハ以^テ南^ノ
と^スる^ハハ^ハ以^テ莊^子の^ハ説^術の^ハ篇^ヲ等^シて^ハ以^テ此^ハを^ハ以^テ建^立
生^ノの^ハ篇^ハも^ハ闡^釋と^シ養^ノの^ハ論^ハある^ハと^シ今^ハも^ハ是^レ叙^術の^ハ極^ト
則^チなり^ハ然^レも^ハ莊^子の^ハ叙^術の^ハ一^ハは^ハ論^ハある^ハに^ハあ^らず^ハ
只^ハ氣^ヲ論^スる^ハハ^ハ生^ノ熱^ハ論^ハなり^ハ此^ハ理^ハ二^ハつ^ハを^ハ一^ト
人^ノの^ハ言^ハを^ハ万^事の^ハ通^ハする^ハもの^{ナリ}心^ヲを^ハ付^シて^ハ一切^ノ
事^ヲも^ハ以^テ叙^術と^シて^ハ以^テ叙^術の^ハ古^ノ叙^術
術^ノの^ハ書^ハと^シて^ハ曾^テて^ハ以^テ論^スる^ハ只^ハ叙^術の^ハ古^ノ叙^術
の^ハ叙^術習^ハふ^ハと^スる^ハハ^ハ以^テ天^ノ狗^ヲを^ハ以^テ祖^トと^スる^ハ推^ス

生得の勇いなる其力も備つて流るるよおれ一
業以て人の氣を統へて其用よく生得の勇気
を中へ入るるからゆへに論まへてこれ今昔
文明も成る初学より去州の理と論終つても
預て物のごとくして其実の古人よ及ぶるごと
く一学問もまじり

一問 叙術の心神の妙用なり何ぞ秘する事ありや
曰 理の天地の理なり我々知る所天下何ぞ知る者
なり人秘する者初学のよあなり秘せざれば初
学の者信あらず是をゆりその一の方使れ

故に秘するごとくならぬ事の末なり極意よあは
初学の者何の事（事）もなくみづりにはあはく
ん得るも何れは是一人よあはるるはくつて
害ありからゆへに主均をまへてそのをくぞいお
るべしとてうに秘術はむしては問はあはく
とくとも廣く流るるごとく秘すこと
は多くは兵方の才使なり未熟の者も秘
術一具の勝気ぬれは秘術もあはく
又他より足るるを名も知るも流るるなりことなり
とくありよ評紙付ることあり

あるべし一概の論すべし一切の本心なるを
こゝのたれなるなりといふも言の漏るる害なるを
こゝあるといふもよりて隠密することあるべし
術の本と世間應用の本と其理替はこれれ
叙術の本も心を用ふ邪正の別と精粗を
より是と日用應接の別と試み邪正の別と
あつたまきれ所収よく自はせば是をより小をも
大なる益なるべし

一心の明くありて塞ふことなきは所収の氣を
剛健よく屈することなきは所収の心氣のこ

一併なり分ちてついでと新れぬ大は大小れ
不足なれ大の塊の熾なりは新溼なるは火光明
なりは人身一切の用をれ氣のなす所なり故に氣剛
健なる者の病生せん風を畏懼も感すること
氣柔弱なる者の病も生し易く邪氣も感し易
し氣病に心若くは体疲る醫書に曰百病の氣
より生はくは氣の所衰はるるは病の生する
正しくは故に人を剛健活達の氣と居しを
以て基本とし氣を養ふ道ありて心ありて
此の氣速と失ひく毒ありて動く氣を動する

別捷果敢の力と夫の小知と以て却て其の明と寧く
心昧く氣高動を氣と云ふ血氣盛なりといふも身
自在なす血氣の一旦として根を動して遂に虚
なり是等の事ハ劍術の事と云て試みてあるべし
故に初学の士ハ先孝材の人事と云へ人欲を去る
ある人欲高動せざる氣を収めて執持せし別
捷果敢にして其心の明を助く氣別捷なりと云ふ
ことハ事決むる決せざる所より小知を用ひて心身の
明氣塞く是ハ惑と云劍術も亦其の神定つて
氣和し應用を忘るして事自然なるべし若し其の

格別なり物とも其初を先別捷活達の氣と云ふこと
小知は捨て欲を脚りて其決断しつても打碎く
大丈夫の氣象ありて其熱しき心自然の極
則小知を去りて其其せんとも若し頑固不
成りし和とあり若し墮氣なり唯劍術のこゝ小知は
弓馬一切の藝術といふも先大丈夫乃志を立別捷
活達の氣を去りて其其せんとも若し此氣はと
別捷活達にして其の原なり人只を去りて其其せん
のこゝあり小知と欲と容をりて其其せんとも若し
用氣なきを世間一切の事と云ふも論を

こゝろを心と裁く一力の用はなほ者なり自力
小試て志ある一書と讀人の言を究るはよし
て自力にて治るべき道理のうりまはなりて身
の用はなほ是はなうりまはなりて學術藝術
一切の事其理を少くも自ら自身に試み心は澄する
時ハその事の邪正難易とくくはなうりまはなり
こそ是を修むといふ

天狗藝術論卷三終

天狗藝術論卷四

一問論小書論十文字論後等の傳あり何れも利ありん
曰何を問こは思れも論實物なり實ここの自
在はなすの事ありあつて其物とて或は
謙を付柄に強ひはは或は後とてひく用あり
を先人のけりありなりをまゝにまゝつて
その術を扱めて此とて用く自在はなうりまは
なり今も流儀とてある者ありなりを器とては傳ひ
るにこゝろを他の器よりなり熱くは器とて
くくはなりなり利ありて一途にてありて得るに

此法より何れも其を内充せりて活するなり此時
ある者は積聚の病は胸腹のあつて其病の何れなりとす
あつて其れを氣味何れとすその何れ此をなすらば
凝りたる氣は其れを欲しく動を欲せり腹の
うち鳴るや此時多し腹の内の氣味ありて其れを
汝とて止すなり此時に其れを解すに充つる氣
汝改めし掌とて以てやうううは抑搦下流く拍
ときい彼動する邪氣にさううひ却て其れをさるもの
なる甚實上の付た各あり也して腹の二より
久しくは汝を時い其れをさる也故は實し

なるものい汝をさるく虚なるものい汝をさるく
なり亦背は病あり若し必せなりとす其れなるもの
なり其氣のこうきなりとす一有と胸とと深く
こと方い此れをあれ有ぬとすやうにひく時
氣伸ぶるものなること此れ形とて以て自然并の術なり
氣清む時を心清む心とてはる付るなりとす
心氣の一体なり此術はまは氣の清むを解くこと
併り而い其れをさるは術なり發は其れに續なる
ものありてせうとて拂ひ其れを力とて其れ
をさるなり其れを其れとす一其れを其れとす

めいじの二王を採のし〜のむ〜し〜
収じ〜必〜と線香のま〜時を定め結伽跏す
る〜も及〜んたのこ〜中〜して形を正〜して氣を
活きのの〜あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
も間暇の時〜活きの〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
束縛合ひ血脈流り〜して清りぬ〜氣爽〜して病の
ゆ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
きりも同〜一人を向ひ坐〜或は物對〜ま〜ん事
成務ふ時同〜胸〜肩と成并きたるの〜ん〜ん
〜〜〜清りぬ〜これ〜也〜男婦の生きた〜こと〜の〜ん〜ん

ゆ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
喫〜茶は飲時〜活きのある〜〜〜〜〜〜〜
心とけぬ時〜後をぬぬの事〜成て自然の氣活する
このをりぬぬの〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
こ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
こ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
おと〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

歩ゆする者の歩ゆる上の如くこれく足は以て歩ゆ
する所の体持して腕腋は捷く形骸なるもの
なり駕輿下の歩ゆするところをてちる下
剣戟を執る者氣滑りくさるるべきは足と以てゆこと
あつて人の頭はつてさくめ神氣といふはさるる小狭あり
自らこつて心志のまきくす刃の右と先を
捨つたは
先をたす所の前足は活くまきのきり一切の事
これ常の所す下
ぬはぬきなりとせ
も人と對してても工夫のなることなり
儀のたまはたの
足はくひとさるるにさるる先とさるるしてすむ足と活

踵を踏くゆくこと力の風流なりふあ
はすむ
活く足と使ふは自由れさるる氣あふりて向ふ
ひらきこれ
鞠と蹴者の足はくひとつひと同じ
上平のたまの歩ゆるをと後より突よ
蹴おさるる
ことなりこと氣活して也力も充つた定つておま
上の如く動てさるるをさるる瞬下より呼吸してま
はるるゆなり下よの歩ゆるさるる得るさるる
まはるる物とさるるのなりことさるる下
定まらるる氣
さるるよりして生活する胸より上より呼吸して上はさるる
成て下はさるるなりなりさるる亦上よの活物なりとさるる
なりなり

時^{さいり}争^あり大よふくきよものなり是等^{せい}は事^{こと}のなる武^ぶと
知^ちる一^{いつ}故^ゆよ人の方^{かた}のするに下^{くだ}控^{かへ}く上^{かみ}はるをその
早^{はや}く疲^{つか}ふくものなり此等^{せい}の事^{こと}は始^{はじめ}くす年月^{げんげつ}の
觸^ふる心^{こころ}と付^つて試^しむ時^{とき}天地^{てんち}の間の物^{もの}は其^{その}丈^{だけ}の
往^ゆくをその下^{くだ}に作^{つく}らるるは心^{こころ}と付^つて一^{いつ}事^{こと}に
主^{しゅ}あつて是^{こゝ}に未^まむらなるなり一切^{いっけつ}乃^{すなは}ち事^{こと}は其^{その}求^{もと}む
まを其^{その}時^{とき}の人^{ひと}よりあつてその心^{こころ}を其^{その}のなり軍^{ぐん}書^{しよ}
小^こまの位^ゐとてゆ^ゆくもの名^なは田^{でん}文^{ぶん}也^{なり}人^{ひと}は西^{せい}作^{たく}成^{せい}
んと付^つて一^{いつ}事^{こと}の名^なは田^{でん}文^{ぶん}也^{なり}人^{ひと}は西^{せい}作^{たく}成^{せい}
んて心^{こころ}は其^{その}法^{ほう}術^{じゆつ}の種^{しゆ}やして切^きはるる人^{ひと}も一^{いつ}軍^{ぐん}

中^{ちゆう}よと取^とりて一^{いつ}事^{こと}は其^{その}心^{こころ}を其^{その}の益^{えき}と爲^なす
事^{こと}多^{おほ}く一^{いつ}事^{こと}は其^{その}心^{こころ}を其^{その}の益^{えき}と爲^なす
あれ其^{その}取^とりて

一^{いつ}軍^{ぐん}事^{こと}の謀^{ぼう}計^{けい}と以^もて人^{ひと}と軟^{あやむ}くの術^{じゆつ}なり此^{こゝ}はよ智^ち
熟^{じゆく}せる事^{こと}は其^{その}心^{こころ}を其^{その}の益^{えき}と爲^なす
曰^い君子^{くんし}是^{こゝ}に用^{もち}ふ時^{とき}は國^{くに}の治^ち平^{へい}は器^きとなり小人^{せうじん}こ
れと用^{もち}ふ時^{とき}は其^{その}心^{こころ}を其^{その}の益^{えき}と爲^なす
一^{いつ}切^きの事^{こと}は其^{その}心^{こころ}を其^{その}の益^{えき}と爲^なす
私^し心^{こころ}は其^{その}心^{こころ}を其^{その}の益^{えき}と爲^なす
盜^{たう}賊^{ぞく}と爲^なすの益^{えき}と爲^なすの害^{がい}と爲^なす

志情欲利害より何れを以てまこと忠を重んずるの者か
よも小智の物なり成りて故に先正其志を立せ以て
愛せしめて後百事を成るべし一はよも正其志を立せ
るも軍術等と學ぶるも功利の言を以て心此よりこ
き小知恵巧を考ふるべし是を以て士の乃とするの誤
ありて一劍術と學ぶるも此藝に熟しとて是を以て
過切法を以てて胃道なりとせしむるも藝術却て
力の害に極まりて此藝術の罪はありて此志の遠
くありて然らば其度も同一なり物の達者も勇謀兼
備する大剛の者なり其考ふるは是を以て忠誠と

れ然らば是は用ひて登城となす故に謀計は士
道ありて是を以て軍忠はなすは士道と
別加別本宅の實を以て弁考る杖を以て義理を以て
忠より何れは君の難に救ひしるを忠とて此道と以て
論し事以て論するは不智れは夫軍法は人教と
立し備を設け其の謀を陳とせしむる奇
兵を用ひ謀を以て敵を破るの術なり邪を以て
正に敵する者其賊なり備を設け其謀を用ひすは法
なり我れ其の謀を論し其賊なり其我れ其の士は備
つて可なりんや其も謀術は志を以て其の備を以て

と没^{しや}て款のまじりこまのあらひつが主術と云ふが
何れ款の捨^すてたれは是れはあつて可なりんや
諸々其術多端なりといふも早先人情はあつて
用をなすものなり人情は應せざるの殊^{こと}と術と
知^していふも用紙なきは醫作のまじり書と流^たる方
いふもこれ其病の因^ゆて起る可と知^らずあふ
業を放^はしてつて他の病と引出はるこゝ人情紙
あること其將の知^らずあり相伝ありあつてはあつて
是れ人情和せざるものなり人情紙せざる可^しを殊^{こと}却
て禍^{わざ}たりといふ今由^ゆりり醫作あること業紙

候して却て他の病紙の如^{ごと}くは款累^たりて
候^はたたあつて人情の股^{また}なり而^して款の殊^{こと}
何れあつてはだつて款のあつては軍の人情
股^{また}なり候^はるこゝ用ゆり候^はる故^ゆに将^して人情
とぬれ候^はる候^はる今^{いま}の事^{こと}あり而^して各將^し法術の
は^はる是^{こゝ}古人の糟粕^{そうぱく}なりとて糟粕と云^はて精汁と云^は
己^{おの}れ其^{その}おの量^{りか}れと匹夫^{ひつふ}を事^{こと}紙^して事^{こと}
の中より時^{とき}は高^{たか}紙のまじり候^はる事^{こと}あり候^は
て物^{もの}紙^し物^{もの}の作^し候^は候^はる事^{こと}あり候^は
備^{そな}へ備^{そな}へ上^う備^{そな}へ軍^{くわん}留^{りゆう}それ^{ごと}く乃^{すな}は法^はりり給^{たま}ふ給^{たま}ふ

崩と浮のさうたみなをくぐりてしとくしとくしとこれ
己或城と攻城と守ると伏奸次討取等軍は少
の兵出で大崩とたなることと各々半次等
してき場(向)をき多練をたつて大河に渡り
んとすはるもこれい

一河に流取に款取にせは款もさく流に以て
我とあざむく下一豈にれひり志はことありて
天下をれ悪くせんや

曰わく汝の言ふ所の押形の一通なり幕家戯のもの
右より致ありとくまに取を一つくして此印を

餘術をたれごころのことも又さうの上の子をたれと
あると幕の定石に致ひ家戯の約組活物等(は)な
ま押形とさふなりふは自然す所(は)其中よりあふ
約(は)さし子(は)流出と勝負を決するなり凡て是る一切
此半(は)れ押形のことくなることとさう(は)な記との
れつと流もまごかくのこ(は)の器量(は)さう(は)めて古人の
押形の中より臨機應変のさう(は)記奇兵の流術(は)
ま(は)所(は)あ(は)りてれり胸臆(は)より流出(は)若(は)なり左の
良將(は)漢樵(は)賤夫(は)の志(は)つぎ(は)とんて(は)並(は)よ(は)りて(は)新(は)し(は)き
術(は)と(は)なり(は)軍中(は)も用(は)ひ(は)る(は)こと(は)あ(は)り(は)な(は)ら(は)ざ(は)ら(は)ぬ

行の付見こく定こくこれ珠術の物とするものなり
殊ともまの古人の押形を知くこれ後学の因こす可は
学術も亦あり古人の迹よりこれの正なるを
悟るこくあるも一切の事これ常は心を用ひこ
耳目のありおとて物事の種こく事ある所の
ま河の要は但すこく又軍中の款味方ともい大塊
すれひよりをこくたのめく自由を成こくもの
なり常は古人の法と考こく法と出こく事と珠と
誼は自在れおこく物成るを以ておこく
吾人天祖の法徳よりて今日為は福ありこくも

一念の心は善ふと惡ふと種こく此妄心生こく終は
天狗界に入こく天祖の法徳と訓こく力は福あるこく夫
よりも疾く汝等情と悟むこく天狗といおは
おのまろ小知は慢こく人を侮こく人の強弱を
此ひ是れ以て是非得失の境成るこく事と樂
むこく誠ありす欲ありおとぬこくおろき成るこく下
なり只おのこは流る者成るこくおろきに去るこくを
こく若と非こく世間の是れとこく我執の去るこくみな
るめこく彼を怒こくこれを怒こく或は怒こく或は固むて
常は心ありこくをこくこれこく佛あり一日の心

熱湯に飲て熱より大橋と生るるの此類熱の若
 こより程と特効して邪を去る人々を害す等
 よく心と修し一氣を収め魔界を去り人同様に
 道に求むる一途等鼻をうく鼻あると翅
 て人よ筋をうくと悪く悪人を殺すは汝の長に鼻
 尖まぬ鼻をうく翅を却て心と若しぬ人々を害すの
 器なり學術劍術とも只此の道に在るとして若
 と此の道に知るとい内明とありて結核しむ
 故よ本門の教よ飲まへと若れぬ多しひ知是
 うひとく過らあるとともある罪あるは天よ任

するなり此の道に知るとい若れぬ人を知ると此心と以
 と人々を欺き肺に邪を飲する若れぬ人其私心
 名虚に討飲と以て人と誘ふ若れぬ人其私心
 うして其動の虚を討擗を以て人を壓若れぬ人其
 擗の裏に討飲の學術劍術を以て只此の
 道を修して若れぬ人を討つこれ虚れぬ擗を
 以てと擗くへくは飲と以ても動はくへくは巧を
 以ても飲くへくは若れぬ人を討つこれ虚れぬ擗を
 七九情いままの熱湯を飲率とせしめ免
 うるくの熱天狗の列にあると何もの日人同様に

道は悟らんをくく我の言を以て此の言の
ソハ既て草木震動一山鳴谷應一風起つて西
臥撲と見て受悟ぬ中く是の一屏風をある
寝形小蓬々物一と即ち

天狗藝術論卷四大尾

藝術論後

客あると此書試難して曰ふに論するの取理を
辨き情を尽く志と氣の所変成はつて未と事
の應用を審くうぬと未と事人病身又務め
繁き者此志成養ふ小の可なるも藝術終り
此者忠くよめぬは是くさゆ所なり曰吾叙術
者小あゝあ何そ人成導くこと成せんや只
弱冠より好むて藝術ある人小親笑し其
事乃利成討補氣の變化を試みて其病を治

一その理をゆく心術は澄せんことのみ求むる
ふつと多るりくんふ然契まはるここのあまの筆
記しとく予り童蒙に示はるるユウ蒙人予り
童蒙よよめて頻り語ふ結さとも多言ふして
識者乃傍に招くことおそる已むこと
得るべく天狗を備ふて戯談せしむ寢語
也小冊予り豈らつと是と努ん也

享保十四歲次己酉孟春

書肆 武陽

